

② 規模の拡大と商業主義、開催期日

規模が拡大し、大会運営にかかる経費は莫大なものになってきた。I O Cは開催希望都市の減少に悩み、「開催地決定は7年前」という規約を変更し、24年パリ、28年ロサンゼルス開催を決定せざるを得なかった。

開催都市の負担も大きい。I O C収入(57億ドル)の8割は、1960年開始の放送権料である。80年のローマ大会は120万ドルであったが、2016年のリオ大会では28億6800万ドルになった。その多くを持つ米国テレビ局などの利害により大会期日・試合

オリンピックの光と影 (2) 田所金久

り、ナチスによる軍事的、政治的目論見をはらんでいた。

安倍首相の政治的利用もひどい。2020年を憲法改悪の年にしたいと五輪と改憲をセットとした彼は、通常国会の施政方針演説で、オリ・パラの用語を19回使った。そして「新しい時代」「国民一丸」を呼びかけた。

戦争拡大の為幻に終わった1940年の東京五輪では、施設の突貫工事の為、ファシズム的国家総動員法によって学生などを動員した。今回もそれに通じる雰囲気を感じている人も多いようだ。

④ 五輪利用の歪められたナショナリズムと「愛国心」 「国民の期待」「国家を背負って」は競技者に力を与える。しかし同時に偏狭なナショナリズムを生み出す。I O Cは表彰式での国旗・国歌の使用を廃止する決議を提出し過半数の賛成を得たが、政治的利用に傾く発展途上国等の反対で、必要な3分の2には達してはいない。そこで

③ 政治的利用
オリ・パラは大イベントだから政治的に利用されやすい。1936年ヒトラーが率いるベルリン大会がその典型である。「神聖なる火」とされる聖火リレーもこの時から始ま

く導入に偉大な貢献をした嘉納治五郎(当時世界柔道連盟会長)、荻村伊智朗(日本人最初の国際的スポーツ連盟の会長)も、柔道と卓球がオリンピックの競技種目となる時ためらったのは偏狭なナショナリズムの問題からである。戦後間もなく、まだ日本への風当たりが強いロンドン・北京大会のとき、激しいブーイングの中で荻村伊智朗・松崎ギミ代選手は優勝した。その時松崎は笑みを浮かべて闊歩した。感動した周園栄は「スポーツマンは松崎のようでないければならない」と語り、彼女を何回も中国へ招待した。わたしも、その「旧友」の恩恵に預かり、中国への卓球の旅に参加した。荻村は優勝したとき、周りの者が日の丸を振りかざそうとしたが、それを制止した。すると今までブーイングを飛ばしていた、観衆はものすごい拍手を送った。

⑤ 政治的腐敗 関係者の贈収賄
商業主義と偏狭な愛国心に支えられ大会の誘致合戦が始まった時、I O C委員などへの買収が起こった。長野大会の時は資料が隠された。今回はJ O C委員長が辞職に追い込まれた。東京大会ではきちんと資料を残すように、都議会へ条例案が提出されている。IV 日本開催の大会と戦争

と平和の問題

日本で開催されたのは、1964年の東京大会、長野・札幌の冬季大会である。1940年、アジアで最初の大会をめざし、決定していたが、日本の中国侵略、戦争の激化で中止され幻の大会となった。1964年の東京大会は、聖火リレーの最終走者に、広島への原爆投下の日に広島で生まれた青年を起用した。閉会式も国家を起した大行進となった。平和と日本復興のため大きな役割を果たした。しかし、沖繩からは毎日、ベトナム空襲の為の米軍機が飛び立っていた。今回の大会では安倍政権は、戦争が出来る国にしようとして憲法を破壊しようとして

いる中で開催である。私たちが憲法改悪の決議を許さず、9条を守り生かしていく中で、東京大会を開催しなければならぬ。

スポーツの果たす役割は、クーパーも提起したように大きい。先日元プロ野球関係者の野村克也さんが亡くなった時、朝日新聞(2月12日)は、民間人としては異例の、一面のトップで、紙面の半分を使い大きく報道した。天声人語も彼について述べた。続いて社説も掲げた。しんぶん赤旗もコラム欄などで解説をしている。キーワードは「考える」(ID野球)と言うこ

とである。何事につけても考えることを忘れてはならない。

くV 心のレガシー(遺産)
日本政府の圧力でモスクワ五輪をボイコットしたことに、涙を流して抗議し、「スポーツ人はもっと社会的発言を」と常々語っている柔道の山下泰裕(現在I O C委員・日本スポーツ協会会長)はこう語っている。

「私が本物の柔道家かどうかは、これからの私の人生を含めて決められることです。柔道家として学んだことを、生活や人生に活かしていく、それが出来て初めて真の柔道家と言えるはずですよ。」
マラソンで2度メダルを獲得した有森裕子は次のように述べている。「現状は復興五輪に向けて進んでいるとは見えません。メダルもその色が本物になるかは後の生活したい。震災の事や共生・共存の社会、障がい者への対応などについて、人々が五輪前より考えられるようになることが最終的な成功です。」

建造物や道路などの遺産だけでなく私たちの心に素晴らしいレガシーを残したいものがある。広島・長崎での開催という私の夢は実現しなかったけれども、2020年代を迎える最大の平和の祭典にしたいものです。